

日本医療秘書実務学会 第3回全国大会 基調講演および発表一覧

8月25日(土)

【基調講演】 講演者	演題	講演概要
九州大学医学研究院 教授 荒木 登茂子 先生	医療におけるコミュニケーションの重要性	医療におけるコミュニケーションの重要性が叫ばれている。特に医療秘書や事務職員は、患者さんと最初に出会い、最後に送り出すという重要な役割を果たすために、患者さんとのコミュニケーションのあり方が問われる立場に立つ。重い病気や悩みを抱えた患者さんに対するきめ細やかな配慮は患者さんのところを癒す力を持つ。しかし一方で配慮不足は患者さんのところに傷を残し、闘病への気持ちをそぐ危険性もある。今回は患者さんの心理やコミュニケーションの持つ力について概観し、医療現場におけるよりよいコミュニケーションのあり方を共に考える機会としたい。

【研究発表】

敬称略 (共同発表の場合、名前の後の*印は、主発表者)

8月25日(土)

順序	発表者(所属)	発表テーマ	発表概要
1	水野 綾子 (高知赤十字病院 医療情報管理課医師事務支援室)	当院における医師事務作業負担軽減への取り組み	当院では平成22年4月より医師事務支援室を立ち上げ、診断書作成業務、がん登録、外来支援業務(診察記事代行入力)、院内感染サーベイランスやNCD、JACVSDなどのデータベース入力、退院時要約作成など順次開始し、勤務医の負担軽減に取り組んできた。今回、退院時要約記載率向上に向けた取り組みと、NCD、JACVSD入力業務について現状の問題点と課題を検討したので報告する。
2	中楠 登志子*(関西女子短期大学) 西山 良子(同)	関西女子短期大学における医療秘書教育と課題	昨今の厳しい就職状況にあって、本学医療秘書学科医療秘書コース学生の就職率は100%を維持している。しかし、やっと就職した病院を短期間で離職したり、辞めたいと相談に来る卒業生が多くなった。そこで、医療秘書になるという目的を持って修学し、卒業した学生を対象に、実際の現場で働き始めて理解した事柄と、さらに医療秘書として働くために必要な意識や能力についてアンケートを実施した。また、在学生に対するアンケートも実施した。それらの結果から、今後の医療秘書教育について考察を試みる。

順序	発表者(所属)	発表テーマ	発表概要
3	笹瀬 佐代子 (岡崎女子短期大学)	診療所の事務職員に求められる能力と医療秘書教育のあり方	診療所に事務職員として就職した場合、求められる資質、知識、能力は、勤務先によって異なる。秘書、情報処理、医学、診療報酬などの分野に分類し、診療所および診療所に勤務している事務職員に調査を行い、学校での医療秘書教育の教育内容の重点目標について考察する。
4	阿河 香里* (回生病院 医療クラーク課) 松浦 美江 (同) 横田 佐理子 (同) 稲毛 麻衣 (同)	回生病院における医師事務作業補助者の業務	当院でも平成 20 年 5 月より医師事務作業補助者を配置、クラーク室を立ち上げ、カルテの代行入力や診断書作成・退院時要約・診療情報提供書の書類作成補助などの業務に関わっている。導入後 4 年が経ち、当院でのクラーク業務の実践状況と現在の問題点、また今後の課題について検討したことを報告する。
5	瀬戸 僚馬* (東京医療保健大学医療保健学部医療情報学科) 蓮岡 英明 (備前市立備前病院) 若林 進 (杏林大学医学部付属病院) 三谷 嘉章 (慶應義塾大学病院) 武田 まゆみ (潤和会記念病院)	医師事務作業補助者による処方・注射オーダの代行範囲に関する研究	医師事務作業補助者には、処方せんの記載代行や、診療記録の代行入力認められている。しかし、処方・注射にかかわることは同職種が行う業務の中でもすぐれてリスクが高く、筆者の先行研究でもまだ 1 割程度の病院でしか実施されていない。安全性と効率性のバランスを取るためには、医師事務作業補助者による処方・注射オーダの代行範囲を定義し、その範囲で代行入力を行うことが必要と考えられる。そこで、本研究では複数の県において医師に質問紙調査に行った上で、代行入力が可能と考えられる範囲を定量的に明らかにした。その上で、医師や薬剤師など複数の職種による検討を加えた上で「医師事務作業補助者による処方・注射オーダの代行範囲に関するアウトライン」を構築したのでその概要を報告する。

8 月 26 日(日)

順序	発表者(所属)	発表テーマ	発表概要
6	米本 倉基* (藤田保健衛生大学) 野田 真喜子 (名古屋大学医学部付属病院) 黒野 伸子 (藤田保健衛生大学)	医療事務職員のキャリア・デザイン ー医療事務職員は何を目指して働くのか?ー	医事や医師事務作業補助、医局秘書などの業務は、実務経験の過程で発生する業務に関する疑問について自己学習を持続できる能力(自分で勉強できる力)が求められるが、その前提には自己のキャリアアップに喜びを感じる動機づけが必要となる。本発表では、持続的自己学習の動機づけ要因となる医療事務職が目指すキャリア像について、現場スタッフのインタビュー調査に基づく質的分析結果を報告するものである。

順序	発表者(所属)	発表テーマ	発表概要
7	江頭 万里子*(長崎女子短期大学) 吉野 美智子(近畿大学九州短期大学)	医療管理秘書士の教育指定校の授業における一取り組み	近年、医療機関でもサービスの質の向上に努めており、医療従事者には高いホスピタリティ力が求められている。院内外において良好な人間関係を築くためには礼儀正しい言葉遣いも大切であると考え。特に医療秘書は、様々な立場の人と接する機会も多く、正しく美しい言葉遣いをすることが望ましい。本稿では、医療秘書実務に関する授業で実施した、学生自身の言葉遣いに対する意識を高める教授法とその成果を報告する。
8	中原 亜紀美(川崎医療福祉大学大学院 修士課程 医療秘書学専攻)	大学医学部の医局(教室)における秘書の呼称と業務内容ー全国実態調査からー	医療秘書に関する研究は徐々に増加しているが、学問的体系はまだ未確定な部分が多い。今後、医療秘書がその専門性を発揮するためにも、医療秘書の実態を明らかにし、医療秘書の概念を構築することが必要であると考えられる。 本研究では、全国の大学医学部の医局(教室)における秘書に対する実態調査を実施した。その調査結果から呼称と業務内容を中心に考察する。
9	藤原 由美(自由が丘産能短期大学)	医療機関における事務職の呼称と業務内容	近年の高度化、複雑化する医療機関において、事務職が新たに注目を浴びている。多様化する患者や深刻化する医師不足に、適切に対応しうる人材が必要とされているからである。医療機関における事務職の業務内容は多岐に渡り、その呼称も異なるが、この点を明確にする必要性はきわめて高い。本研究では、これらの現状を先行研究を基に調査分析し、今後の課題について検討する。
10	赤木 一博(一般財団法人 河田病院 医局)	精神科病院における医師事務作業補助者の役割と課題	精神疾患に対する国や地域の動向を踏まえ、精神科特有の観点から、精神科病院における“医師事務作業補助者”の役割と必要性について発表し、合わせて現在の業務内容の報告と、今後の課題について考える。
11	山本 英樹(医療法人社団 善仁会 小山記念病院 医師事務作業補助室)	新人医師事務作業補助者への教育について ～ゼロからの医師事務作業補助者教育～	当院は、医師事務作業補助室を立ち上げ3年になる。立ち上げ当初は、診療情報管理士が1名在職していたのみで私を含め他の職員3人は、医療知識に乏しい状態からのスタートであった。そんな医師事務作業補助室が、本年、新たに新卒の新入職者を5名迎える。今回は、当院の新人医師事務作業補助者に対する教育について、初任者研修の流れや具体的な指導方法、今後の課題等について取り上げる。

順序	発表者(所属)	発表テーマ	発表概要
12	米田 和代*(大垣市民病院 診療部医療クラーク室 医療クラーク) 田中 聡子(同) 山田 佳恵(同) 木村 直美(同) 後藤 美帆(同) 牧野 裕子(同) 大澤 隆美(同) 青山 美佳子(同) 佐藤 典子(同) 戸谷 智美(同) 伊藤 由美(同) 宮野 ゆかり(同) 小川 靖代(同) 柳瀬 由美(同) 広瀬 美紀(同) 藤井 文香(同) 土屋 悦子(同) 磯谷 正敏(同院 副院長 医療クラーク室長)	当院、医療クラーク室に おけるサポートチーム体 制の取り組み	現在、当院では医療クラークを主治医意見書担当2名、院内がん登録担当2名、他13名を22診療科に配置し業務を行っている。平成20年10月医療クラーク室設置時より診療科担当制で配置され、担当者は文書作成のほか回診代行入力・各種データ管理業務などを行っている。最近では、ドクターとの関わりも深くなり業務依頼が多く、また専門性が求められるようになった。この現状より、業務の見直し調整を図るため平成23年4月より「フォロー体制を確立し業務を円滑に進める」を目標に掲げ、サポートチーム体制を立ち上げた。その活動内容と現状を報告する。
13	片田 桃子(川崎医療福祉 大学)	医師事務作業補助者の導 入とその実態に関する研 究	医師事務作業補助体制加算に関する全国的な規模での実態調査・研究はきわめて少ない。そこで本研究は、医師事務作業補助体制加算を導入した全ての医療機関1,442件(2009年6月1日現在)を対象とした全国規模のアンケート調査を実施し、更に、その調査結果を補完することを目的としてヒアリング調査を行い、その実態を把握した上で今後の課題について考察を試みる。
14	小林 利彦(浜松医科大学 医学部附属病院 医療福 祉支援センター)	国立大学病院における 「医師事務作業補助者」 養成プログラムの試行	国立大学病院は医師数が多いこともあり、医師事務作業補助者への教育プログラムはあまり進んでいない。平成24年4月に12人の外来事務職員を新規採用するにあたり、返書やサマリー記載など、医師事務作業の補助を目的とした養成プログラムを開始した。勤務時間内に約2単位/週(1単位1.5時間)で現在試行中である。接客等では問題が少ない反面、座学では、予想外に医学用語を知らない現実があった。将来的には地域へのプログラム開放も計画したい。
15	村上 美紀*(済生会熊本病 院 医療秘書室) 町田 二郎(同院 副院長) 田川 貴浩(同院 医療秘 書室)	済生会熊本病院の電子カ ルテ導入前後における業 務の変遷 ー求められる医療秘書業 務とはー	当院は2011年10月に電子カルテを導入した。導入時の外来診察室サポートのため、医師が外来で行うすべての操作のマスターを目標に医療秘書室員の研修を行った。導入後は代行入力の検査項目や件数も増加した。診療情報提供書作成補助や診断書作成補助など、以前から行っていた業務に加え、回診サポートや各学会のデータベースマネージャーなど、医師が求められる業務が変化してきた。電子カルテ導入に向けての取り組みと業務の変遷に通じ、今後求められる医療秘書像を考察した。